埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第49集

太　田　遺　跡

県道古河・加須線関係埋蔵文化財発掘調査報告

1985

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第49集

太田遺跡

おおた

県道古河・加須線関係埋蔵文化財発掘調査報告

1985

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県における道路網の整備は、近年の交通事情の変化に対応しながら、地域開発及び環境整備事業も加えて計画・実施されてまいりました。

これに基づき、県道古河・加須線の建設も計画されましたが、この路線の一部に埋蔵文化財包蔵地が存在しておりました。そこで、この遺跡の保存について関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、路線の変更は不可能で、やむをえず記録保存を目的とした発掘調査を行なうことになりました。

発掘調査は、昭和58年度に埼玉県の委託を受け、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施いたしました。また、その結果は当事業団報告書第49集として刊行することになりました。本報告書が学術研究・教育普及事業等に活用され、文化発展の一助になることを願っております。

最後になりましたが、発掘から本報告書刊行に至るまで多大な御支援、御協力をいただきました埼玉県土木部道路建設課・行田土木事務所・北河辺町教育委員会及び地元関係者の方々に深く感謝をいたします。

昭和60年3月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長　長　井　五　郎

例　　言

1．本書は埼玉県北埼玉郡北川辺町大字柏戸に所在する太田遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、県道古河・加須線建設に先だつ事前調査であり、埼玉県教育委員会が調査し、埼玉県の委託により財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が主体となり実施したものである。整理・報告書作成作業も引き続き昭和59年度に財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が受託し、実施した。

　なお、調査の組織は２ページに示したとおりである。

3．出土品の整理および図版の作成は主に宮井英一が担当し、木戸春夫・赤熊浩一の協力を受けた。

4．発掘調査における写真は石川俊英、宮井が、遺物写真は宮井が撮影した。

5．本書の執筆はⅣ章の中世以降を木戸が、他は宮井が担当した。

6．本書に掲載した挿図類の縮尺は原則として次の通りである。

グリッド配置図　1/400

遺物　小形品（1/3）　大形品（1/4）　古銭（1/2）

7．グリッド配置図で用いたスクリーントーンは、今回の調査で掘り下げた範囲を示す。

8．Ⅴ章で触れた花粉・珪藻・鉱物分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託しその報告に基づいた。

9．本書の編集は埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究部第５課職員があたり、中島利治が監修した。

10．本書の作成にあたり、下記の方々から御教示・御協力を得た。（敬称略）

埼玉県立博物館　利根川章彦

株式会社資生堂宣伝製作部　高瀬瑞枝

目　　次

序
例　言
Ⅰ　調査の概要
1.　発掘調査に至るまでの経過…… 1
2.　調査の経過（日誌抄）…… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境…… 4
Ⅲ　遺跡の概観…… 9
Ⅳ　出土遺物……11
Ⅴ　結　　語……24

挿図目次

第1図　周辺の主要遺跡分布図…… 5
第2図　周辺の地形…… 7
第3図　遺跡位置図…… 8
第4図　Ⅰ・Ⅱ区グリッド配置図……折込
第5図　Ⅲ区グリッド配置図・層序図……折込
第6図　出土遺物(1)……13
第7図　出土遺物(2)……17
第8図　出土遺物(3)……19
第9図　出土遺物(4)……21
第10図　煙管実測図……22
第11図　古　銭……23
第12図　分析資料採取地点柱状図……24

図版目次

図版1　Ⅰ・Ⅱ区全景　Ⅲ区全景
図版2　出土遺物(1)　（第6図参照）
図版3　出土遺物(2)　（第6図参照）
図版4　出土遺物(3)　（第7図参照）
図版5　出土遺物(4)　（第8図参照）
図版6　出土遺物(5)　（第9図参照）
図版7　出土遺物(6)　（第11図参照）

Ⅰ　調査の概要

1. 発掘調査に至るまでの経過

埼玉県では，増大する交通量に対処するために各種の道路建設工事を進めているが，県道古河・加須線においても，北川辺町地内で改良工事が計画された。

県教育局文化財保護課では，開発関係部局と各種の事前協議を行い，文化財保護と開発事業の円滑な調整を図っている。今回の事業担当課である県土木部道路建設課とも定期的に協議を行っている。

昭和56年，道路建設課から文化財保護課へ，昭和56年１月22日付け道建1531号をもって「道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」照会があった。文化財保護課では，遺跡地図の確認とともに，現地調査を実施し，その結果を検討して下記のとおり道路建設課へ回答した。

1.　文化財の所在

　北川辺町№６遺跡（古墳～平安時代集落跡）が所在する。

2.　取扱い

　上記埋蔵文化財は現状保存することが望ましい。計画上やむを得ず現状変更する場合には，文化財保護法第57条の３の規定により，事前に文化庁長官へ埋蔵文化財発掘通知を提出し，記録保存のための発掘調査を実施すること。

　なお，発掘調査を実施する場合は，事前に北川辺町教育委員会及び当課と協議すること。

その後，文化財保護課と道路建設課では，保存策について協議を重ねたが，路線変更は不可能となったため，やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになった。

昭和57年11月11日に行われた「昭和58年度公共事業計画と文化財の調整会議」において，発掘調査実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団を加えて，発掘調査の実施方法について協議を行った。この協議結果を受けて文化財保護課では，昭和58年５月27日付け教文第235号をもって，下記のとおり発掘調査を実施するよう，道路建設課及び事業団へ通知した。

1.　調査機関　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

2.　調査区域　北川辺町柏戸

3.　調査期間　昭和58年11月～昭和59年３月

早速，事業団では調査体制を整えた。埼玉県知事から文化財保護法第57条の３に基づく埋蔵文化財発掘通知が，事業団からは，同法第57条の１に基づく埋蔵文化財発掘調査届が文化庁長官へ提出され，調査が開始された。

文化庁からは，昭和59年６月11日付け委保第５の626号をもって調査通知を受理した旨の道知があった。

（文化財保護課）

発掘調査の組織

1. 発掘

主体者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理事長	長井五郎
		副理事長	岩上　進
		常務理事	石川正美
庶務経理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管理部長	佐野長二
			関野栄一
			江田和美
			福田　浩
			本庄朗人
			福田啓子
発掘	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調査研究部長	横川好富
		調査研究副部長 兼調査研究第五課長	小川良祐
		調査研究第三課長	水村孝行
			宮井英一
			石川俊英

2. 整理

主体者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理事長	長井五郎
		副理事長	岩上　進
		常務理事	石川正美
庶務経理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管理部長	小宮秀男
			関野栄一
			江田和美
			福田　浩
			本庄朗人
			岡野美智子
整理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調査研究部長	中島利治
		調査研究副部長 兼調査研究第五課長	小川良祐
			宮井英一
			赤熊浩一

2. 調査の経過（日誌抄）

太田遺跡の調査は、昭和58年11月１日から昭和59年３月31日までの５ヶ月間にわたって行なわれた。なお、調査対象区域は路線のカーブする部分に当たり、しかも幅約15m、延長約310m と東西に細長いため、区域を横切る用水を境に、便宜的にⅠ～Ⅲ区と呼称する。

11月　調査のためのプレハブ建設及び器材搬入等を終了し、表土除去作業に入る。表土除去作業は重機を用い、Ⅰ区東側から始めた。また、試掘坑による土層確認を行なったが、その結果Ⅱ区東側において２層上面より遺物の出土が認められ、重機による削平は２層上面までと決定した。但しⅠ区・Ⅱ区とも廃土置場が確保できなかったため路線を南北に縦割りにし、片側ずつ調査を行なうことにした。Ⅰ区は北側部分を基準面まで掘り下げた後、３ｍ×３ｍを基準とした試掘坑の設定にかかった。

12月　Ⅰ区では３ｍ×３ｍの試掘坑を12ヶ所、３ｍ×６ｍの試掘坑を２ヶ所設定して基準面より２ｍ程掘り下げたが、遺物・遺構等の検出は皆無であった。Ⅱ区は路線の南側を重機によって削平し、Ⅰ区と同様に東側から３ｍ×３ｍの試掘坑を３ヶ所、３ｍ×９ｍの試掘坑を１ヶ所設定して掘り下げたところ、48グリット以西で若干遺物が検出された。遺物は主に土師器である。また、Ⅰ・Ⅱ区にグリットを設定した。グリットは３ｍ×３ｍを基本とし、路線に沿った形で設定した。なお調査区が路線のカーブする部分に当たるため画一的なグリットの設定は難しく、Ⅰ・Ⅱ区とⅢ区に分けて行なった。

１月　Ⅱ区50グリット以西を、手掘りによって全面的に削平する。遺物は主に２、３層から出土し、傾向としては西側の方が密度が高い。なお、遺物は古墳時代～近世に属するものでほとんどが細片として出土するが、L-53、M-53・54グリットにおいて完形及び完形に近いものが４点出土した。土層等の確認は４本設定したトレンチで行なった。

また、Ⅲ区もⅠ・Ⅱ区と同様に２層上面まで重機で削平し、平行して３ｍ×３ｍの試掘坑を設定し、掘り下げを開始した。

２月　Ⅲ区に路線に沿った方向で３ｍ×３ｍのグリットを設定した。また、試掘坑もグリットに従って第４図のように設定して掘り下げた結果、遺物は９～14グリッド付近に密集しており、他のグリットではほとんど検出されなかった。なお、この部分は暗青色の粘土が入り込んでおり、凹地状になっていたものと思われる。

Ⅱ区は、西端の三角形部分に重機を入れ２層上面まで削平する。

３月　Ⅱ区西端の三角形部分は全面を掘り下げる。この部分は遺物の密度が高く、特にG-G′トレンチ付近は凹地状になっていたものと思われ、遺物は極めて高い密度で出土した。

なお、Ⅱ区H―56グリット付近において30本程の乱雑な杭列と並べられた枝の上を杉の葉で覆ったものからなる遺構が検出されたが、これはごく最近まで行なわれていた漁法の一つで「いけす」と呼ばれるものであるらしい。

発掘作業は下旬までに終了し、写真撮影・航空測量・器材搬出・プレハブ撤去等を行ない、末日までに全調査を終了した。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

太田遺跡は、およそ北緯36°11′、東経139°40′に位置する。所在地番は埼玉県北埼玉郡北川辺町大字柏戸2059、他で、埼玉県遺跡地名表73―6、新田遺跡とされているものの東側部分に当たる。

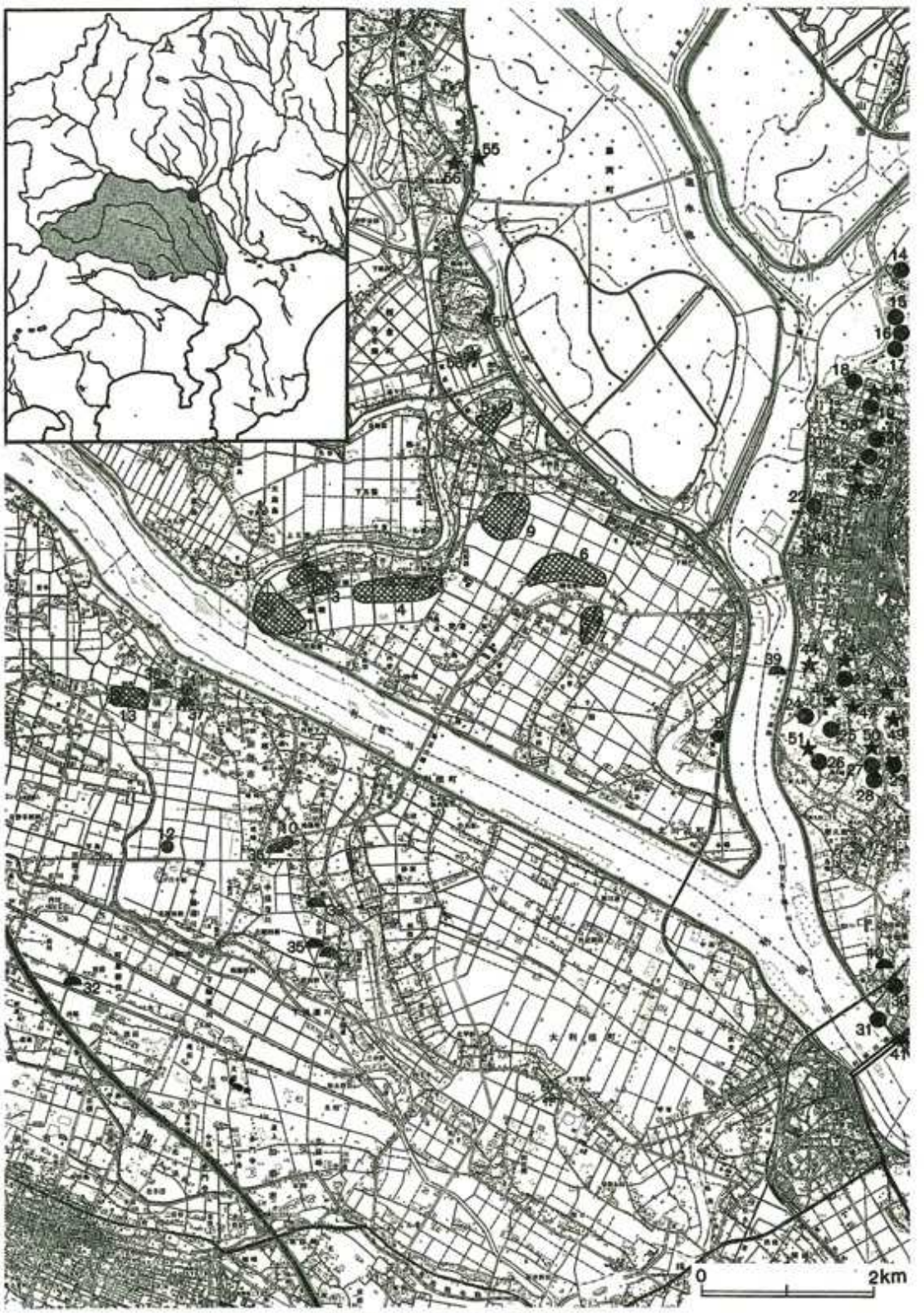
北川辺町は、埼玉県の北東の隅に位置し、江戸時代には古河藩に属し、川辺領と呼ばれた。北及び北西側は東流する谷田川を境として群馬県及び栃木県に接し、東側は南流する渡良瀬川を境に茨城県と接している。また、南西側の加須市とも東流する利根川によって区切られ、いわば四方を河川によって囲まれた輪中地帯を形成している。現在は標高12m前後の極めて平坦な地形を呈しており、町の周囲及び中央部に僅かに高く形成された自然堤防上に集落が散在する以外は一面の水田地帯が連なっており、県北東部の穀倉地帯を形成している。

さて、次に当該地域の地形を概観してみたい。当地域は、県東部に広がるいわゆる中川低地の北端に位置し、粘土と砂が互層になった沖積層によって覆われている。この中川低地は、本来縄文海進による奥東京湾の海域に属し、主として利根川水系による三角州堆積物によって形成された平坦な低地である。もっとも、上部に堆積している粘土層は主に河川の氾濫によって堆積したもので、現在では自然堤防・後背湿地・河畔砂丘・古流路跡などの微地形が認められる。また、特に北川辺地域では、それらの微地形は主に渡良瀬川・谷田川両河川の浸食・氾濫に起因しており、従って、北川辺町全域を含む低地は、渡良瀬川低地あるいは太田川低地とも呼ばれている。

本太田遺跡は渡良瀬川低地のほぼ中央に位置している。この地域は、渡良瀬川・谷田川及び利根川の3河川の蛇行及び度重なる氾濫によって形成されたが、特に前2河川による影響は著しい。例えば、埼玉県史の「水害関係略年表」によれば、「北川辺領」と銘記されているものだけでも文化2年（1805）～明治3年（1870）の65年間に19回もあり、およそ3年半に1度は大洪水にみまわれていることになり、小規模な出水まで含めれば殆ど毎年の様であったろう。また、現在みられる主要な自然堤防も渡良瀬川・谷田川両河川の蛇行によって形成されたもので、旧流路とともに明瞭なS字状の蛇行を示しながら発達している。また、その背後には広大な後背湿地が発達しており、現在でも水用として利用されている。もっとも、昭和29年の農地改良以前には池、沼地なども多か

1～31：古墳時代～平安時代　32～41：古墳　42～58：貝塚（縄文時代早期～前期）
1. 飯積遺跡　2. 須賀遺跡　3. 山越遺跡　4. 麦倉遺跡　5. 藤畑遺跡　6. 新田（太田遺跡）　7. 曽根遺跡　8. 伊賀袋遺跡　9.（名称不明）　10. 穴咋塚遺跡　11.（名称不明）　12. 中町南遺跡　13. 別所遺跡　14. 羽生田B遺跡　15. 清六C遺跡　16. 中島山遺跡　17. 別所遺跡　18. 漆原遺跡　19. 新田裏遺跡　20. 帯屋敷遺跡　21. 狐塚遺跡　22. 雀宮遺跡　23. 長谷向台遺跡　24. 川戸谷遺跡　25. 虚空蔵遺跡　26. 風張遺跡　27. 鴻巣B遺跡　28. 鴻巣C遺跡　29. 鴻巣A遺跡　30. 堀の内遺跡　31. 高台古墳　32. 鶴ヶ塚遺跡　33. 諸塚遺跡　34. 稲荷塚遺跡　35. 浅間塚遺跡　36. 石子塚遺跡　37. 稲荷塚遺跡　38. 大越古墳群　39. 頼政郭遺跡　40. 中田新田遺跡　41. 高台遺跡　42. 本城寺貝塚　43. 白壁町遺跡　44. 牧野地遺跡　45. 長谷遺跡　46. 原町西遺跡　47. 原町南遺跡　48. 原町遺跡　49. 旭丘遺跡　50. 城地遺跡　51. 沼ノ台遺跡　52. 野渡遺跡　53. 新田遺跡　54. 御髪内遺跡　55. 篠山遺跡　56. 北遺跡　57. 一峰神社境内遺跡　58. 小橋遺跡

周辺の主要遺跡



第１図　周辺の主要遺跡分布図

ったようで、水田耕作も決して楽ではなかったと思われる。

さて、次に北川辺町内及び周辺の遺跡の分布についてみてみたい。本地域は、いわゆる奥東京湾の最奥部に当たる。現在の渡良瀬川の東岸及び谷田川西岸の台地上には縄文時代早期～前期の貝塚が扁存しており、例えば前期貝塚ならば関山期の篠山貝塚、黒浜期の野渡貝塚・新田貝塚・御髪内貝塚などがあげられよう。そして、これらの貝塚が何れも標高20m以上の島状の台地上にのみ存在していることから、当時においても町内の低地などは湿地帯であったか、あるいは氾濫等による水害の危険の極めて高い地帯であったことが想像されよう。

古墳時代以降になると、渡良瀬川低地・加須低地などにも遺跡が散見されるようになる。もっとも、それらの遺跡も自然堤防上若しくはそれに沿った微高地に形成されることが多く、標高15m前後の低地部分は以前として集落の立地要件を満たすには至らなかったようである。北川辺町地内でも古墳時代以降の遺跡は9ヶ所確認されているが、何れも自然堤防に沿った立地を示している。また、現在までに調査・報告されているのは「飯積遺跡」のみであるが、他の遺跡も時期的には古墳時代～奈良時代を主体とするもののようである。

飯積遺跡は標高25m程の自然堤防上に立地しており、1979年に北川辺町教育委員会によって試掘調査が行なわれた。実際の発掘面積は10㎡程の小規模なものであったが、出土した遺物は、図示されたものだけで80点程あり、時期的にも鬼高式～真間式に含まれる坏・甕等が殆どである。ただ遺物の出土は全て包含層で、遺構は検出されていない。また、その包含層は「青灰色粘質砂質土」を基調としており、自然堤防の下にある本遺跡とは若干異なるが、遺物に完形品の少ないことや土層に局部的な攪乱が認められることなどから、遺物の大半が河川の氾濫等によって他地域から流されてきたものである可能性も高い。

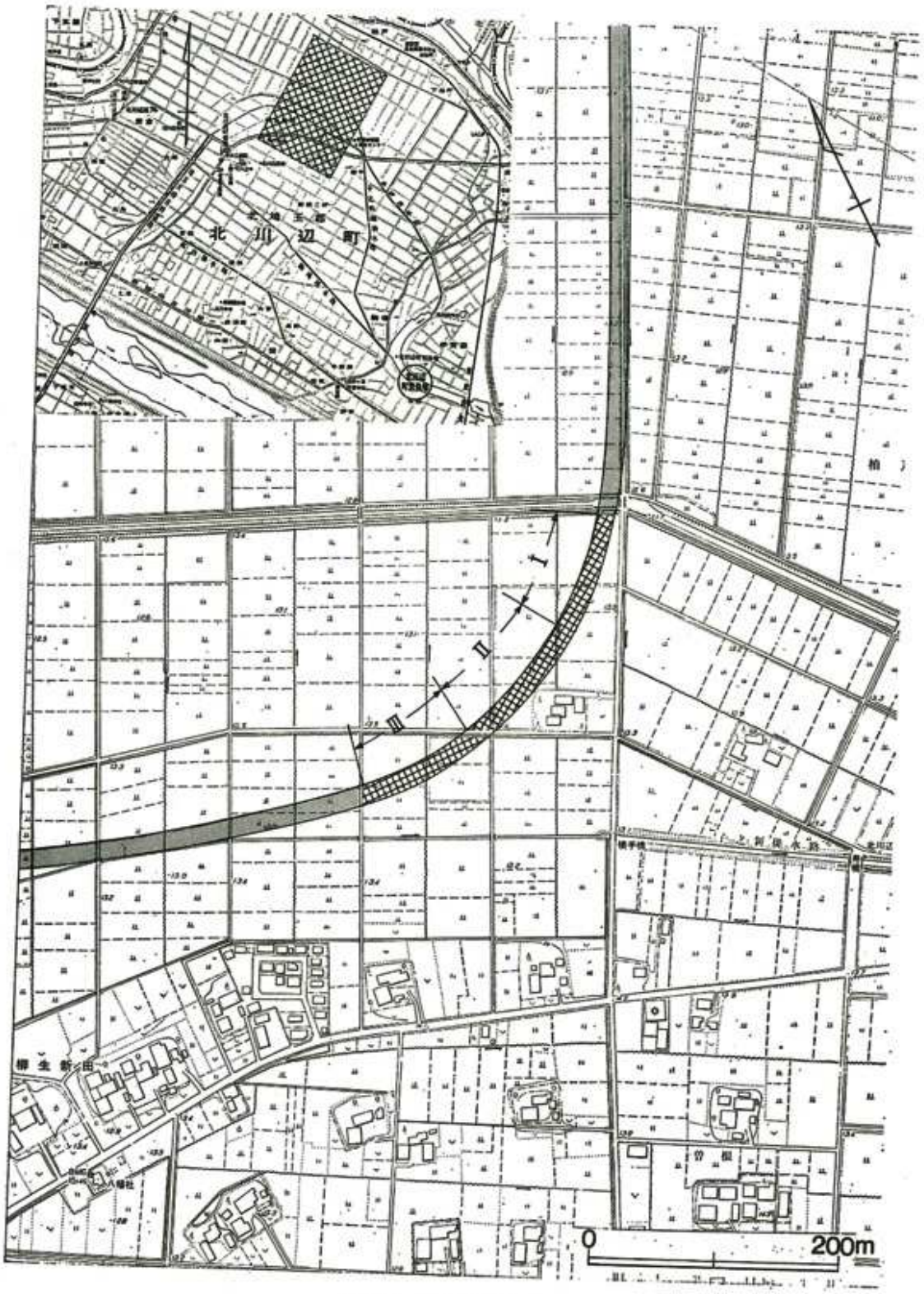
このように、当地域では前述したような度重なる河川の氾濫による影響は、例えそれが自然堤防上といえども免れ得ないであろうし、従って、特に包含層出土の遺物については注意が必要であろう。また、遺構にしてもその検出面はかなり深い部分にあると考えられる。

参考文献

埼玉県　1975　土地分類基本調査「鴻巣」（国土調査）
埼玉県　1979　土地分類基本調査「古河」（国土調査）
埼玉県　1982　『新編埼玉県史』資料編２（弥生・古墳）
埼玉県　1983　『新編埼玉県史』資料編13（近世４・治水）
埼玉県教育委員会　1975　『埼玉県遺跡地図』
埼玉県教育委員会　1975　『埼玉県遺跡地名表』
埼玉県地域総合調査会　1980　『埼玉県市町村誌』総説編
栃木県教育委員会　1975　『栃木県遺跡地図』
栃木県教育委員会　1981　『篠山貝塚発掘調査報告書』
茨城県教育委員会　1977　『茨城県遺跡地図』
大塚孝司　1980　「飯積遺跡」『北川辺町埋蔵文化財報告』第１集

中新田
小保呂
通り
上新田
谷新
樋口
高島
小合地
宇奈根
上五箇
下五箇
0 1 2 Km
自然堤防
旧流路跡
(旧河道)
河原
(現河道の氾濫原)
氾濫原
(後背湿地)
火山灰台地
(ローム台地)

第2図 周辺の地形



第3図 遺跡位置図

Ⅲ　遺跡の概観

太田遺跡は、埼玉県遺跡地名表で新田遺跡とされているものの東側部分に当たり、遺物散布地としての性格をもつものである。本遺跡は、県道古河・加須線の建設に伴なう事前調査として、その路線部分のうち指定区域にかかる部分について発掘調査を行なった。また調査に当っては、周囲に同様の遺跡の調査例がなく包含層と土層層序との関係が明確でなかったため、いわゆるグリット法を基本とする発掘を行なった。

調査は、3m×3mに設定したグリットを基本に行なったが、調査区域が15m×310mと東西に細長いため、便宜的に用水路と境にⅠ区～Ⅲ区の調査区を設定した（第3図）。また、グリットの設定に当っては、座標は関東地区座標原点第Ⅸ系を用い、国家三角点Ⅲ等「海老瀬」(X＝24690.26、Y＝－16048.83）を基準としたが、調査区域が丁度路線のカーブする部分に当るため、路線に沿ってⅠ・Ⅱ区とⅢ区の2種類に分けた。なお、各々の座標の表示は図上の任意の点（⊙）について示した。

以下各々の調査区について概要を述べる。

Ⅰ区では、路線の中央部付近に3m×3mの試掘坑を12.3m×6mの試掘坑を2設定し、略13～14層まで掘り下げたが遺物、遺構は検出されなかった。

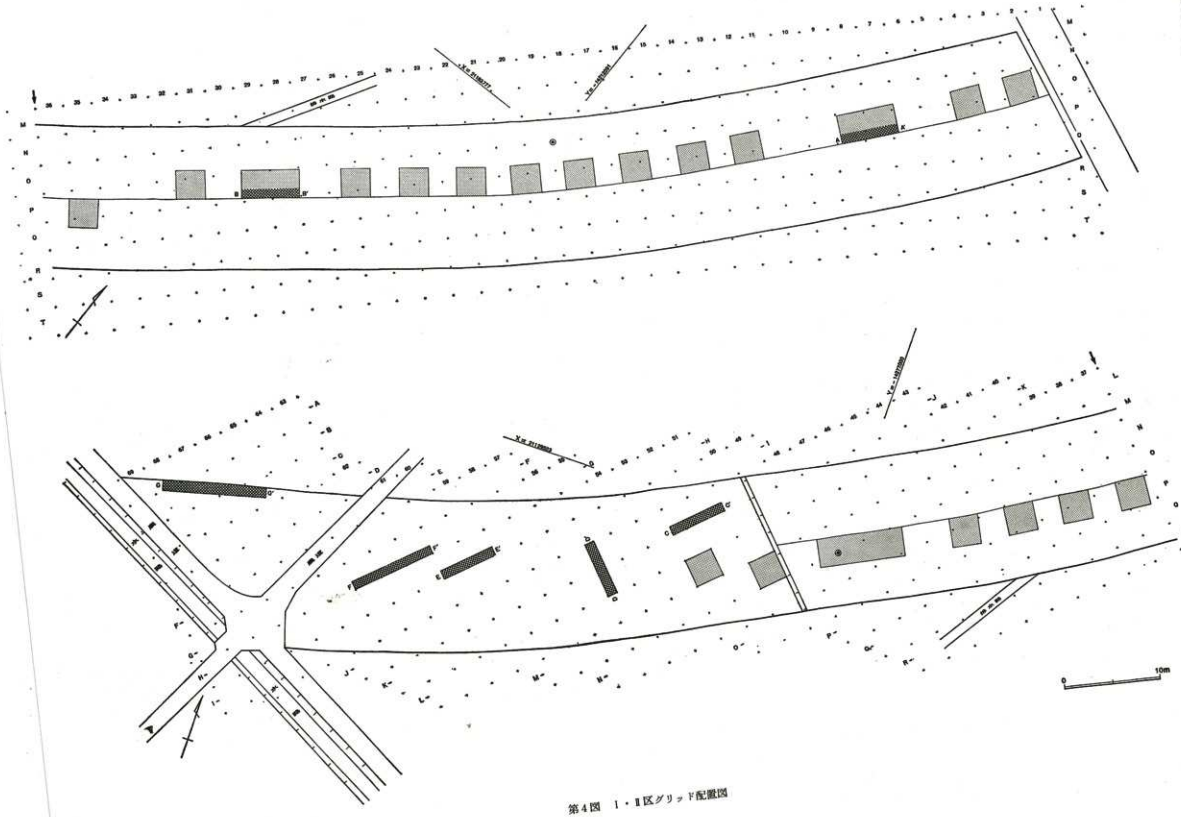
Ⅱ区で遺物の出土が見られるのはO－50グリッド以西である。遺物は、主に2a層及び3層から出土しているが、層位の差と出土遺物の時期差との対応関係は認められない。もっとも、土層確認のために設定した5本のトレンチ（C－C′・D－D′・E－E′・F－F′・G－G′）の土層断面図を見ても分かるように、1層～3層が比較的平坦な堆積状態を示しているのに対し、3層より下の部分では層序もまちまちで堆積状態も部分的に大きく乱れている。つまり、1層～3層が比較的新しい時期にあまり時間差をおかずに堆積したのに対し、それより下の層は比較的古く氾濫の激しい時期に攪乱を受けながら形成されたものと思われる。従って本区では、本来かなりの時間差のある遺物の多くが同じ様に2・3層より出土していることから、これらの遺物は他地域から、少なくとも当発掘調査地域外から河川の氾濫等によって流されてきた可能性が高い。

Ⅲ区は、Ⅱ区と同様に遺構は検出されなかったが、遺物は約240点出土している。ただ、出土層位はⅡ区と同様に2層及び3層が主体であるが、出土した遺物の90％以上が14列以東に密集しており、他の部分での密度は極めて低く、特に西端では1点も検出されなかった。なお、第5図上9～14列のスクリーントーンの部分は遺物の最も集中していた部分で、土層も他とは異なりやや青味を帯びていたが、遺構としての振り込みは検出できなかった。おそらく自然的な凹みに流されてきた遺物がたまったものであろう。

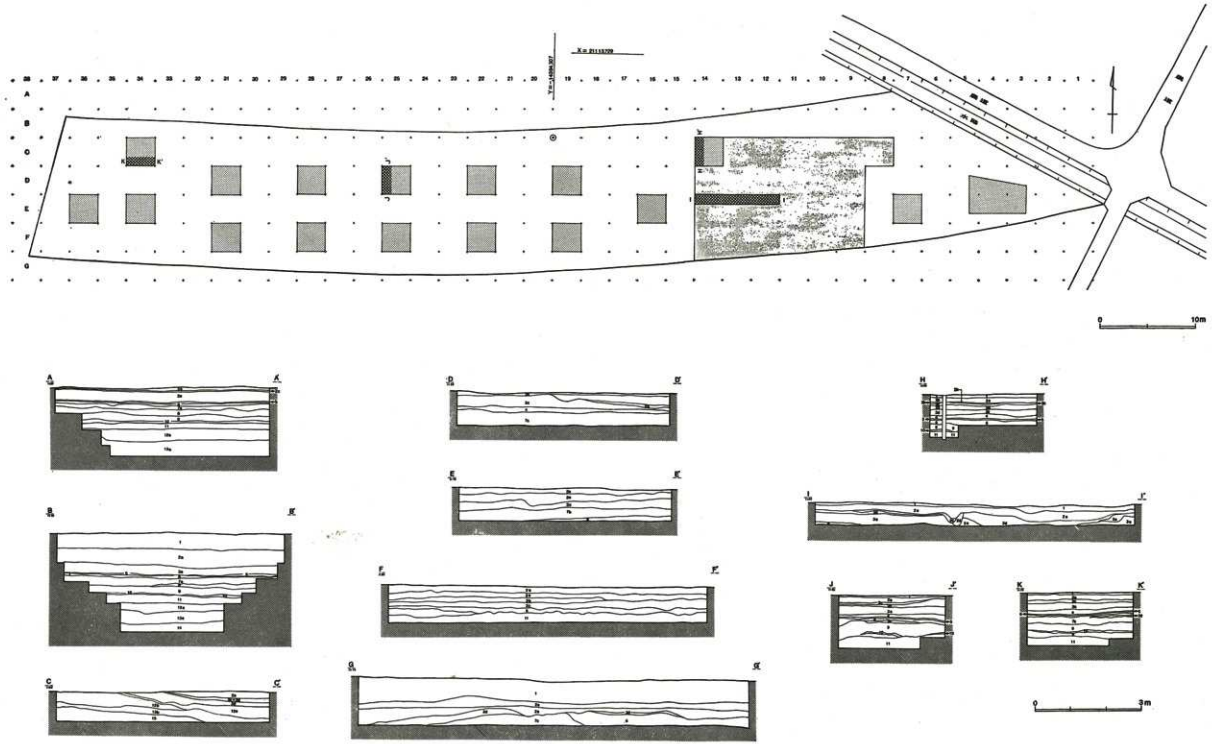
さて、次に各区の基本層序についてであるが、前述したように部分的にかなり乱れた堆積を示すところもあり、また何れも極めて細かく分層されるため、土層相互の関係が複雑になり過ぎる嫌いがある。そこで、Ⅰ区～Ⅲ区を通して全体を15層に分層し、地区毎に変異のある場合はそれらをさらにabc……と細分して以下に示した。第5図を参照されたい。

なお、色調の項については湿潤状態におけるもので、あくまでも相対的な観察であることを記しておく。

層位	色調	特徴
1	赤褐色	所謂表土＝耕作土。２層に比較的近いが、植物の根による攪乱著しく鉄分多い。
2 a	橙褐色	灰褐色粘土を基本にし、橙褐色の筋（植物の根か？）が無数に走る。炭化植物様のものを少量含む。締りややよく、粘性弱い。尚本層は短期間における何回かの急激な堆積によって形成された層で、それらのうち部分的にではあるが分層できたのが２ｂ～２ｄである。
b	暗灰褐色	灰褐色粘土を基本にするが、炭化物（植物遺体か？）をかなり含み、やや黒味を帯びる。
c	灰褐色	締りは非常にわるく、粘性はかなり高い。
d	灰茶褐色	質的には２ｃ層に近いが、茶色味を帯びており、締りもややわるい。
3 a	青灰色	締りわるく、粘性やや高い。橙褐色化した植物を少量含む。
b	暗青灰色	質的には３ａ層に近似し、やや暗褐色味を帯びた土を基本にしている。灰白（黄）色の固い粘土が極めて多量に混入する。
c	青灰色	３ａ層に極めて近いが、灰白色の固い粘土様の小ブロック（径１～２cmのものが多）をかなり多く混入する。
d	暗青灰色	質的には３ａ層に近い。植物遺体を多く含む粘土を多量に混入しているため、かなり黒味を帯びてみえる。但し、部分的には（Ⅱ区）植物遺体等はほとんど含まれない。
e	暗青灰色	自然的な攪乱層。細かい層がいくつもまじり合っており、ごく短期間に流れ込んだものと思われる。
4	暗茶褐色	締りややよく、粘性弱い。植物遺体を多量に含む。
5	黒褐色	締りわるく、粘性弱い。細根様の植物遺体を極めて多量に含み、色調的にはやや紫味を帯びる。
6	暗青灰色	質的には３ａ層に近いが、やや黒味を帯びる。植物等は殆ど含まれず、部分的に細砂を含む。
7 a	灰褐色	灰褐色の粘土を基本に、灰色乃至は黄褐色の小ブロック（径約１cm円形）を含む（植物の根によるものか）。締りわるく、粘性やや強い。また水分を多く含み、酸化が速くごく短時間で黒変する。
b	灰褐色	７ａ層に酷似するが、黄褐色の小ブロックは殆どみられず、全体的に緑色がかる。
c	灰褐色	７ａ層に酷似するが、褐色の植物遺体を僅かに含む程度で、ほぼ灰白色の均一な層。
d	茶褐色	植物遺体をかなり含み、粘性の強い層。７層中に一時的に流れ込んだものか。
8	灰褐色	締りはなく、粘性弱い。水分を多く含む。灰褐色の粘土を基本に、青灰色の細砂をブロック状に多量に混入する。
9	灰茶色	質的には７ａ層に近い。灰茶色の粘土を基本に灰色の粘土をブロック状に含む。植物遺体及び炭化したそれをかなり含む。酸化が極めて速く、ごく短時間で黒変する。
10	黒褐色	よく締った砂層。色調的には黒紫及び黄褐色を呈する細砂の層。
11	橙褐色	締りわるく、粘性強い。橙褐色の粘土を基本に、灰白色の粘土を小ブロック状に含む。また植物遺体を極めて多量に含み、酸化は極めて速い。
12 a	灰褐色	灰白色の粘土中に茶褐色乃至は黒褐色の幅５～10mm程の層が２～３条認められる。また炭化した植物遺体も少量含まれ、全体的に締りわるく、粘性強い。
b	灰褐色	質的には12ａ層に近いが、締りは非常によく粘性低い。植物遺体等は含まれない。
13 a	灰褐色	灰色の粘土を基本に、黄褐色の粘土をごく少量ブロック状に含む。炭化した植物遺体も少量含まれる。締りわるく、粘性弱い。
b	灰色	13ａ層でベースになっている灰色の粘土のほぼ単一の層。
14	橙灰褐色	13ａ層に比較的近いが、やや茶色味を帯び粘性強い。炭化した植物遺体を含む。
15	青灰色	締り極めてわるく、粘性低い。水分を多量に含み、土自体が極めて細かい砂状の粒子で構成されている。



第4図　Ⅰ・Ⅱ区グリッド配置図



第5図　Ⅲ区グリッド配置図・層序図

Ⅳ　出土遺物

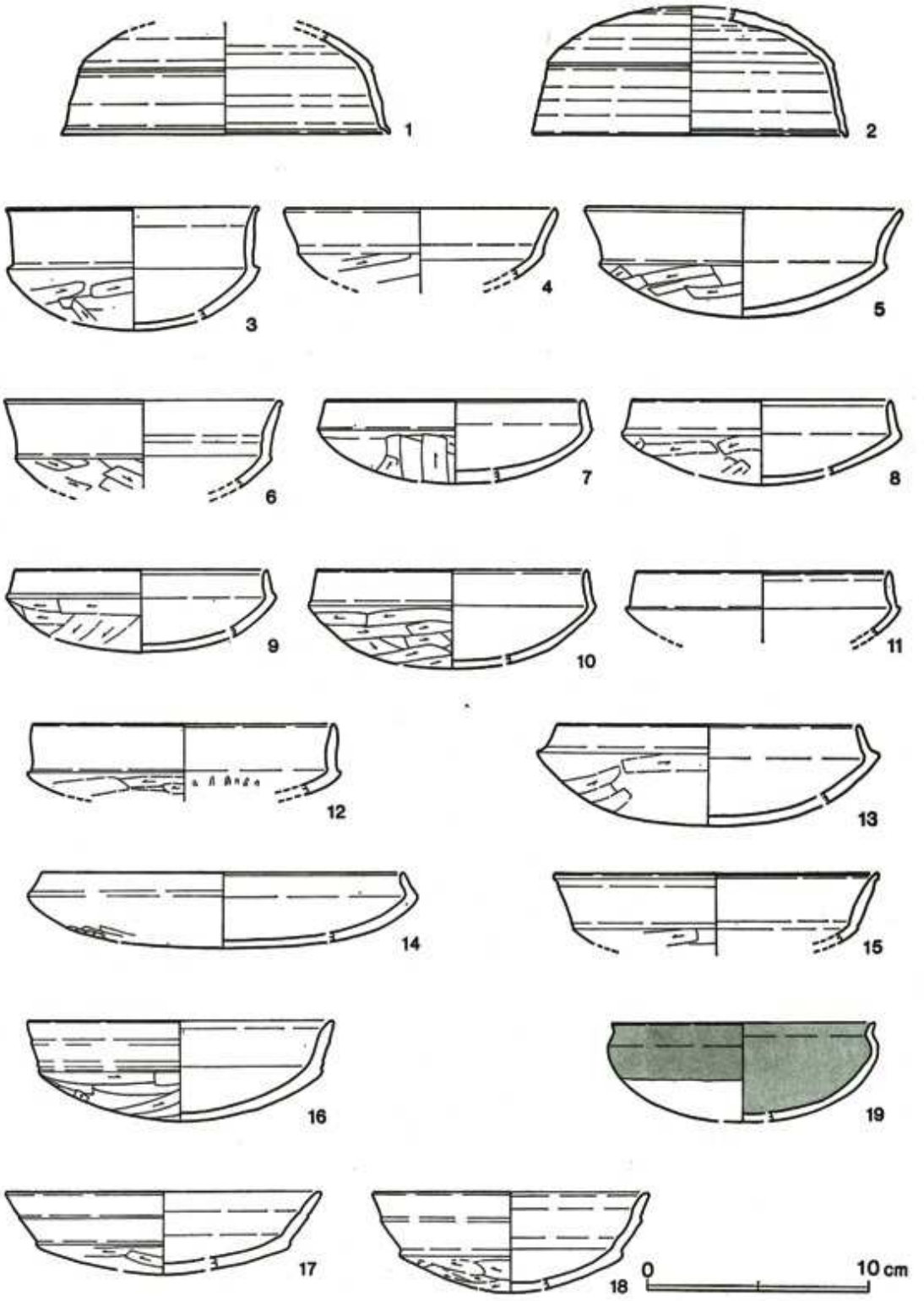
前述したように本遺跡では遺構が検出されておらず、従って遺物は全て所謂包含層からの出土である。もっとも、古くから河川の氾濫等によって形成された地域であるため土層層序は極めて乱れており、遺物の層位的な検討も不適当と言わざるを得ない。

遺物としては、古墳時代～奈良時代、平安時代及び中・近世のものが1,640点程出土しているが、特に古墳時代後期に属するものが多い。もっとも完形品は極めて少なく、ほとんどが細かい破片の形でまとまりなく出土している。またそれらが近世の耕作の及ばない深さからの出土であることや遺跡の立地を考えれば、その多くは他地域から流れ込んだものである可能性も高い。

以下第6図～第11図に出土遺物のうちの主なものを示す。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋 (須恵器)	6図 1	口径　15.2 稜径　13.6 現高　4.7 残口縁≒1/6	口縁部は、外方にやや内湾気味に下り、端部近くで短かく外反する。端部は丸く、内面に段を有する。稜は短かいが鋭くなく下部に凹線を有する。天井部は丸くなるものと思われる。	巻きあげ、ロクロ成形 内外面とも、回転ナデ調整が施される。	焼成：普通 胎土：やや粗 1㎜以下の白色砂粒を多く含む。 色調：内外面黒灰色、断面が赤褐色
蓋 (須恵器)	2	口径　14.5 稜径　13.2 現高　5.8 残口縁≒1/6	口縁部は、外方にほぼ直線的に下る。端部は丸く、内面に段を有する。稜は非常に弱く、下部の凹線も浅い。天井部は浅く丸い。	巻き上げ・ロクロ成形 天井部稜端より約2.7㎝の所から回転ヘラ削り調整が施される(幅約1.6㎝)。他は、内外面とも回転ナデ調整。	焼成：良好 胎土：比較的緻密で、1㎜以下の白色砂粒を多く含む 色調：内外面暗灰色、断面橙褐色
坏	3	口径　11.5 稜径　11.6 現高　5.1 残口縁≒1/2	口縁部は長く、直線的にやや外方に立上がり、端部でやや外反する。口唇上面には、やや内傾する面が作られる。稜は鋭く、顕著である。	口縁部は、内外面とも丁寧なヨコナデ。内面は極めて丁寧なナデ調整が施され、体部外面は斜方向のヘラ削り後、軽いナデ調整が施される。	焼成：良好 胎土：緻密 色調：灰褐色
坏	4	口径　12.6 稜径　11.2 現高　3.2 残口縁≒1/3	口縁部は、やや外湾しながら外方に立上がる。端部は若干外削ぎ状を呈し比較的鋭い。稜は弱く不明瞭。底部は浅く丸くなると思われる。	口縁部は、内外面ともヨコナデ 内面は比較的丁寧なナデ調整が施され、体部外面はヘラ削りの後ナデ調整が施されているようだが、風化著しく不明瞭。	焼成：不良 胎土：1㎜以下の砂粒を少量含む 色調：灰褐色
坏	5	口径　14.6 稜径　13.2	口縁部は、やや外湾しながら外方に立上がり、特に稜部直上は	口縁部は、内外面ともヨコナデ 内面は比較的丁寧な横方向及び	焼成：普通 胎土：やや粗

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
		器高 5.0 残口縁≒⅔	括れが大きい。端部は丸い。稜はやや弱く、底部は浅い丸底となる。	斜方向のナデ調整が施され、体部外面は、斜方向のヘラ削りの後、軽くナデ調整が施される。	色調：灰褐色
坏	6	口径 12.8 稜径 11.8 現高 4.0 残口縁≒⅓	口縁部は、わずかに外反しながら外方に立上がる。口唇上面には、幅1.5mm程の水平な面が作られている。口縁内面には幅2mmの浅い凹線が残される。稜部は低いが明瞭に作られている。	口縁部は内外面とも丁寧なヨコナデ。内面は横方向のナデ調整体部外面は斜方向の丁寧なヘラ削り。	焼成：良好 胎土：緻密 色調：明褐色
坏	7	口径 11.7 稜径 12.6 現高 3.8 残口縁≒¼	口縁部は直線的で短かく、やや内傾する。端部は丸く、稜は弱い。底部は浅く、丸くなると思われる。	口縁部は内外面とも比較的丁寧なヨコナデ。内面も横方向のナデ調整が比較的丁寧に施される体部外面は縦方向のヘラ削りの後、軽くナデ調整が行なわれている。	焼成：普通 胎土：やや粗で黒色粒子を多く含む 色調：灰褐色
坏	8	口径 11.8 稜径 12.9 現高 3.4 残口縁≒⅓	口縁部は直線的で短かく、やや内傾する。端部はやや内削ぎ状になり、比較的鋭い。稜は弱く断面半円状を呈する。	口縁部は、内外面とも丁寧なヨコナデ、内面も横方向のナデ調整。体部外面は横方向及び斜方向の丁寧なヘラ削りが施される	焼成：普通 胎土：やや粗 色調：灰褐色
坏	9	口径 11.6 稜径 12.5 現高 3.0 残口縁≒⅓	口縁部は直線的で短かく、やや内傾し、軽い内削ぎ状の端部に至る。稜は鋭くはないが、比較的明瞭に作り出されている。	口縁部は、内外面ともヨコナデ内面も横方向のナデ調整がかなり丁寧に施される。体部外面は横方向及び斜方向のヘラ削りの後、軽いナデ調整が行なわれる	焼成：良好 胎土：密で、角閃石を少量含む 色調：暗灰色
坏	10	口径 12.6 稜径 13.2 現高 4.3 残口縁≒⅙ 稜残存≒¼	口縁部は短かく、ほぼ直線的で内傾しながら立上る。端部は丸い。稜はゆるい三角形を呈し、底部は浅い丸底になると思われる。	口縁部は、内外面とも丁寧なヨコナデ。内面も横方向のナデ調整が丁寧に施される。体部外面は横方向及び斜方向のヘラ削りナデ調整は認められない。	焼成：良好 胎土：比較的密 色調：暗灰色
坏	11	口径 11.6 稜径 12.7 現高 2.9 残口縁≒⅓	口縁部は短かく直線的で、やや内傾しながら立上る。端部は鋭く作られ、また内側は幅0.5mm程の沈線とともにゆるやかな稜をもつ。外面の稜はかなり顕著に張り出す。	口縁部は、内外面とも丁寧なヨコナデ。内面も横方向のナデ調整が施される。体部外面はヘラ削りの後、丁寧なナデ調整が施される。	
坏	12	口径 13.8 稜径 14.4 現高 3.2 残口縁≒⅓	口縁部は外湾しながら立上り、端部近くでやや内湾する。端部は丸い。稜は比較的鋭く、顕著である。	口縁部は、内外面とも丁寧なヨコナデ。内面は横方向のナデ調整がかなり丁寧に施され、また放射状暗文もわずかに認められる。体部外面は横方向のヘラ削りの後、比較的丁寧なナデ調整が施される。	焼成：良好 胎土：緻密 色調：黒灰色

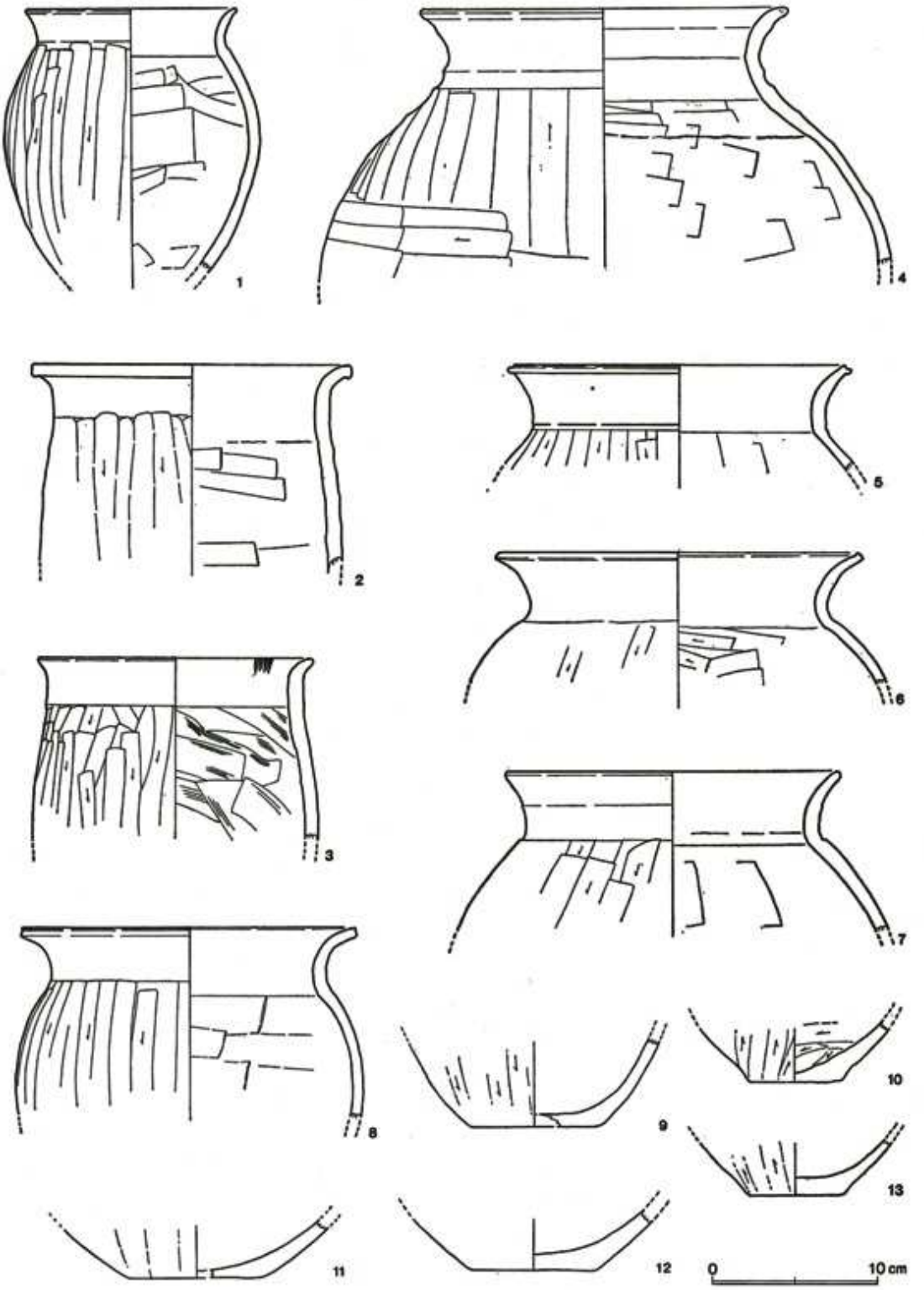


第6図 出 土 遺 物 (1)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	13	口径 13.8 稜径 14.8 現高 3.5 残口縁≒¼	口縁部は短かく直線的で、内傾しながら立上る。端部は丸い。稜は断面三角形を呈し、極めて顕著である。	口縁部は、内外面ともヨコナデ内面は横方向のナデ調整がかなり丁寧に施される。体部外面は横方向のヘラ削りの後、軽いナデ調整。	焼成：普通 胎土：粗 色調：灰褐色
坏	14	口径 16.8 稜径 18.0 現高 3.2 残口縁≒⅙	口縁部は短かく直線的で、かなり内傾しながら立上る。端部は丸い。稜は弱く、上部の括れも明瞭でない。ごく浅い丸底になるものと思われる。	口縁部は、内外面とも丁寧なヨコナデ。内面も横方向のナデ調整がごく丁寧に施される。体部外面は横方向のヘラ削りの後、上半部にナデ調整が行なわれている。	焼成：普通 胎土：緻密 色調 (外)暗灰色 (内)灰色
坏	15	口径 15.0 稜径 13.2 現高 3.2 残口縁≒½	口縁部はほぼ直線的に外方に立上り、端部直下に幅4mm程の凹線状の調整痕を残す。端部は丸く、内側に細沈線状の調整痕を残す。稜は小さいが比較的明瞭である。	口縁部は、内外面ともヨコナデ体部外面は横方向のヘラ削りの後軽くナデ調整が施される。	焼成：普通 胎土：1mm以下の角閃石を含む 色調：赤褐色
坏	16	口径 14.1 稜径 13.1 器高 4.6 残口縁≒¼	口縁部はほぼ直線的に外方に立上り、外面には1～2段の低い段をもつ。稜は鋭くはないが、比較的明瞭である。	口縁部は、内外面とも比較的丁寧なヨコナデ。内面は横方向のナデ調整が極めて丁寧に施される。体部外面は横方向及び斜方向のヘラ削りの後、軽いナデ調整。	焼成：良好 胎土：密 色調：暗灰色
坏	17	口径 14.6 稜径 11.7 現高 3.5 残口縁≒⅓	口縁部は略直線的に大きく外方に立上り、外面には小さな段をもつ。また段直上に幅1mmの浅い沈線を有する。端部は丸い。稜は鋭くはないが、比較的顕著である。	口縁部は、内外面ともヨコナデ内面は横方向のナデ調整が比較的丁寧に行なわれている。体部外面はヘラ削りの後、極めて丁寧なナデ調整が施されている。	焼成：良好 胎土：密 色調：赤褐色
坏	18	口径 12.8 稜径 10.3 現高 4.4 残口縁≒⅙	口縁部は若干内湾しながら外方に立上り、外面には比較的明瞭な段を有する。端部は丸く、内面は段の部分で大きく括れる。稜は断面三角形を呈し明瞭である。	口縁部は、内外面ともかなり丁寧なヨコナデ。内面も横方向のナデ調整が丁寧に行なわれる。体部外面は横方向及び斜方向のヘラ削りの後、丁寧なナデ調整が施される。	焼成：良好 胎土：密 色調：黒褐色
坏	19	口径 12.2 現高 4.5 残口縁≒½	口縁部は、体部から稜をもたずにゆるやかに立上り、端部近くで急激に外反する。端部は丸く鋭い。体部は丸く、極めて滑らかである。	口縁部は、内外面とも極めて丁寧なヨコナデ。内面も横方向のナデ調整が極めて丁寧に施される。体部外面はヘラ削りの後、極めて丁寧なナデ調整が行なわれる。	焼成：良好 胎土：緻密 色調：内面及び外面上半に赤色塗彩

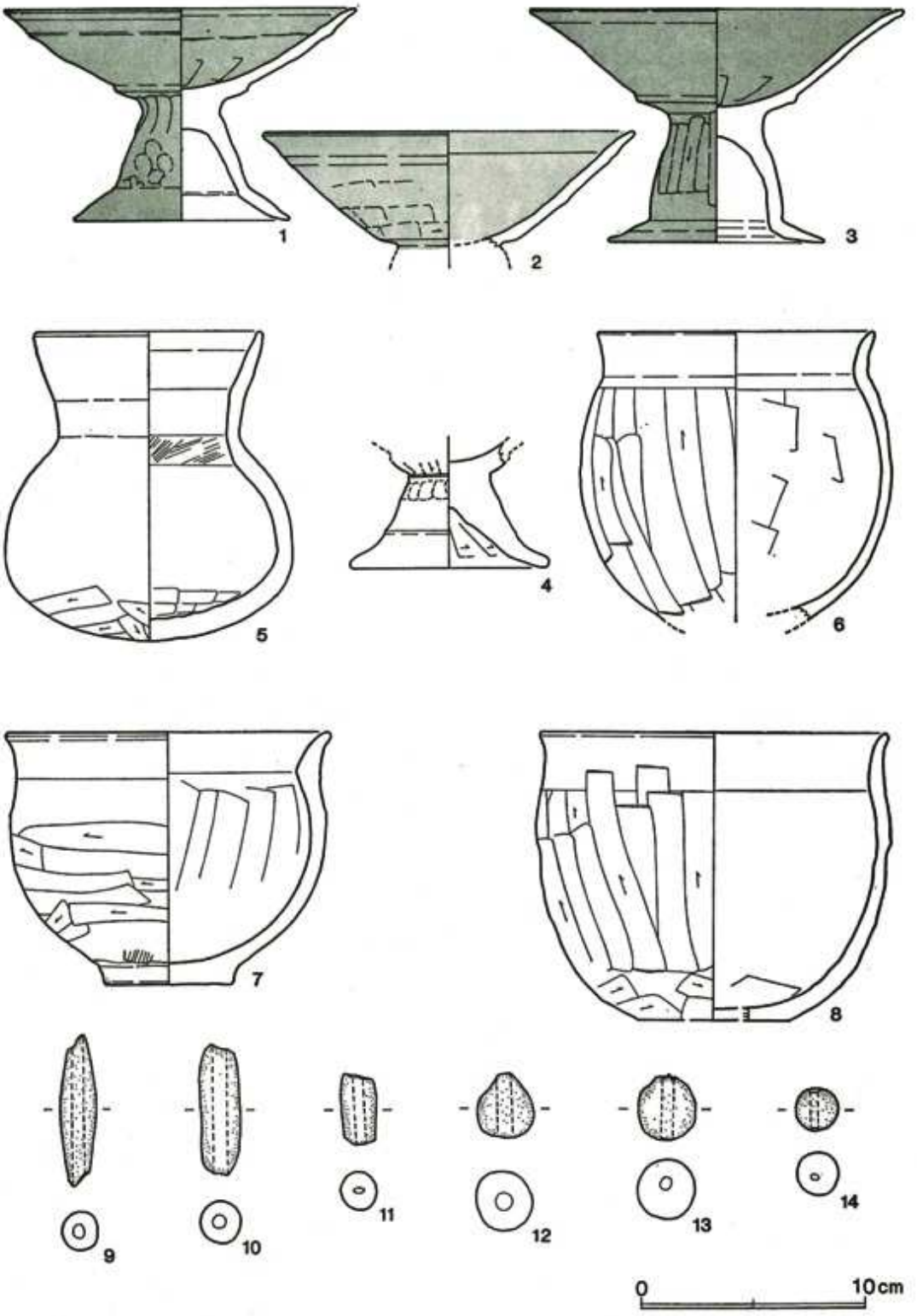
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	7図1	口径 11.0 最大径15.8 現高 16.4 残口縁≒⅓	口縁部は外反しながらゆるく立上り、端部は丸い。胴部は上半に最大径をもち、ゆるやかに底部に向う。接合痕の間隔は約4cm。	口縁部は、内外面とも粗いヨコナデ。胴部外面は縦方向のヘラ削りの後、軽いナデ調整。内面は横方向の丁寧なヘラナデ。	焼成：良好 胎土：密、1mm以下の砂粒を含む。 色調：灰褐色
甕	2	口径 19.8 現高 12.8 残口縁≒¼	口縁部ははやや内傾気味に立上り、端部近くで大きく外反する端部は方形を呈し外側に向く。胴部はわずかに内湾しながら緩かに広がる。	口縁部は、内外面とも丁寧なヨコナデ。特に端部には明瞭な面が作られる。胴部外面は縦方向のヘラ削りの後、軽いナデ調整内面も比較的丁寧なヘラナデが施される。	焼成：良好 胎土：緻密 色調：灰褐色
甕	3	口径 17.0 最大径17.7 現高 11.2 残口縁≒¼	口縁部はほぼ直立気味に立上り端部近くで急激に外反する。端部は丸く、部分的に肥厚する。胴部は口縁から滑かにつながり殆ど張りをもたない。	口縁部は、内外面とも粗いヨコナデ。胴部外面は縦方向の密なヘラ削りのみで、ナデ調整は認められない。内面は斜方向の粗い木口状工具によるナデ。	焼成：良好 胎土：砂粒を含む 色調 (外)暗灰色 (内)灰褐色
甕	4	口径 22.8 最大径35.2 現高 15.9 残口縁≒½	口縁部は大きく外反しながら立上り、胴部との境には幅1cm程の凹線により2条の稜が残される。胴部は大きく張り、その上半に最大径をもつものと思われる。	口縁部は、内外面ともヨコナデ胴部外面は、縦方向のヘラ削り後ナデ調整。ヘラ削りは上部の稜の直下まで及んでいる。内面は横方向のヘラナデ痕が顕著。	焼成：普通 胎土：粗 色調 (外)暗褐色 (内)灰褐色
甕	5	口径 21.1 現高 6.5 残口縁≒⅓	口縁部は外反しながら外方に立上り、端部短かく張り出す。胴部との境は、外面には幅4mmの凹線が引かれ、内面には明確な稜が残る。端部上面には幅3mm程の沈線が引かれる。	口縁部は、内外面とも丁寧なヨコナデ。胴部外面は、縦方向のヘラ削りの後比較的丁寧なナデ調整。内面は極めて丁寧なナデ調整が施される。	焼成：良好 胎土：密 色調：灰褐色
甕	6	口径 22.7 現高 8.0 残口縁≒⅜	口縁部は、外反気味に大きく外方へ開く。端部は方形を呈し、内側にやや張り出す。胴部は内湾しながら大きく開く。	口縁部は、内外面ともヨコナデ胴部外面は、縦方向のヘラ削りの後丁寧なナデ調整。内面は木口状工具によるナデ調整が比較的丁寧に施される。	焼成：普通 胎土：粗、細砂多く含 色調：灰褐色
甕	7	口径 20.6 現高 9.8 残口縁≒⅓	口縁部は、外反気味に外方へ開く。端部は丸い。口縁部下端には比較的明確な稜が作られる。胴部は内湾しながら大きく開く	口縁部は、内外面とも丁寧なヨコナデ。胴部外面は、斜方向のヘラ削りの後比較的丁寧なナデ調整。内面も非常に丁寧なナデ調整が施される。	焼成：普通 胎土：粗、細砂多く含 色調：灰褐色
甕	8	口径 20.6 最大径21.4 現高 11.7 残口縁≒⅚	口縁部は、大きく外反しながら外方に開く。端部は方形を呈し上面には幅2mm程の浅い沈線が引かれる。胴部は大きく内湾しその上半に最大径をもつ。	口縁部は、内外面とも丁寧なヨコナデ。胴部外面は、縦方向のヘラ削りの後軽くナデ調整。内面は非常に丁寧なナデ調整が施される。	焼成：良好 胎土：密、細砂少し含 色調：灰褐色

器　種	番号	大きさ(cm)	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
甕底部	9	底径　7.6 現高　5.3 残底縁≒½	平底の底部から内湾気味に立上り胴部に至る。	胴下部外面は、縦方向及び斜方向のヘラ削りの後軽くナデ調整底面は一方向からのヘラ削りの後ナデ調整。内面は非常に丁寧なナデ調整が施される。	焼成：良好 胎土：密 色調：灰褐色
甕底部	10	底径　5.9 現高　3.7 残底縁≒½	緩く内湾する胴部は底部付近で強く屈曲する。底部は平底だが凹凸が目立つ。	胴下部外面は縦方向、底面は一方向からのヘラ削りが各々施され、ナデ調整は認められない。内面は横方向及び斜方向のヘラナデ調整が施される。	焼成：良好 胎土：密 色調：赤褐色
甕底部	11	底径　8.1 現高　3.5 残底縁≒½	胴部は、平底の底部からほぼ直線的に大きく外方に立上る。	胴下部外面は縦方向、底面は一方向からのヘラ削りの後、極めて丁寧なナデ調整が施される。内面も極めて丁寧なナデ調整が施され、平滑である。	焼成：良好 胎土：やや粗 色調：灰白色
甕底部	12	底径　7.2 現高　3.7 残底縁≒½	胴部は、平底の底部から直線的に大きく外方に立上る。	胴下部外面は縦方向、底面は一方向からのヘラ削りの後極めて丁寧なナデ調整が施され、削り痕は殆ど認められない。内面も、極めて丁寧なナデ調整が施され平滑。	焼成：良好 胎土：緻密 色調：灰褐色
甕底部	13	底径　5.4 現高　3.5 残底縁≒½	胴部は、平底の底部からやや内湾気味に立上る。	胴下部外面は縦方向。底面は一方向からのヘラ削りの後、比較的丁寧なナデ調整が施される。内面もナデ調整が施されるが、部分的に粘土の凹凸が顕著。	焼成：良好 胎土：粗 色調：暗灰色
高　坏	8図 1	口径　15.8 底径　9.7 器高　9.6 残口縁≒¼	浅めの坏部はやや内湾気味に稜をもって立上り、端部近くでわずかに外反する。端部は丸く鋭い。脚部は内湾気味に緩やかに開き、裾部で急激に外方に開くまた端部近くは薄く作られ、端部は丸い。	坏部は内外面とも比較的丁寧なナデ調整。脚部は、基部付近及び裾部に縦方向のヘラミガキが施され、裾部はその後に横方向のナデが加えられる。また中位には指頭痕が顕著にのこる。脚部内面は、裾部で丁寧なヨコナデ。他は縦方向のナデ調整が施される。	焼成：良好 胎土：密 色調：脚部内面を除き赤色塗彩
高　坏	2	口径　17.0 現高　5.3 残口縁≒⅙	坏部は内湾気味に小さな稜をもって立上り、端部近くでやや外反する。端部は丸く、比較的鋭い。	坏部は、内外面とも非常に丁寧なナデ調整が施されるが、外面では横方向のヘラ削り痕も僅かに認められる。	焼成：良好 胎土：密 色調：内外面赤色塗彩
高　坏	3	口径　16.8 底径　9.7 器高　10.5	坏部は、比較的顕著な稜からやや内湾気味に立上り、上半で僅かに外反する。薄手で、端部は	坏部は、内外面とも丁寧なナデ調整。脚部外面は、基部以下に縦方向のヘラ削りが施された後	焼成：不良 胎土：密、砂粒少量含



第7図 出 土 遺 物 (2)

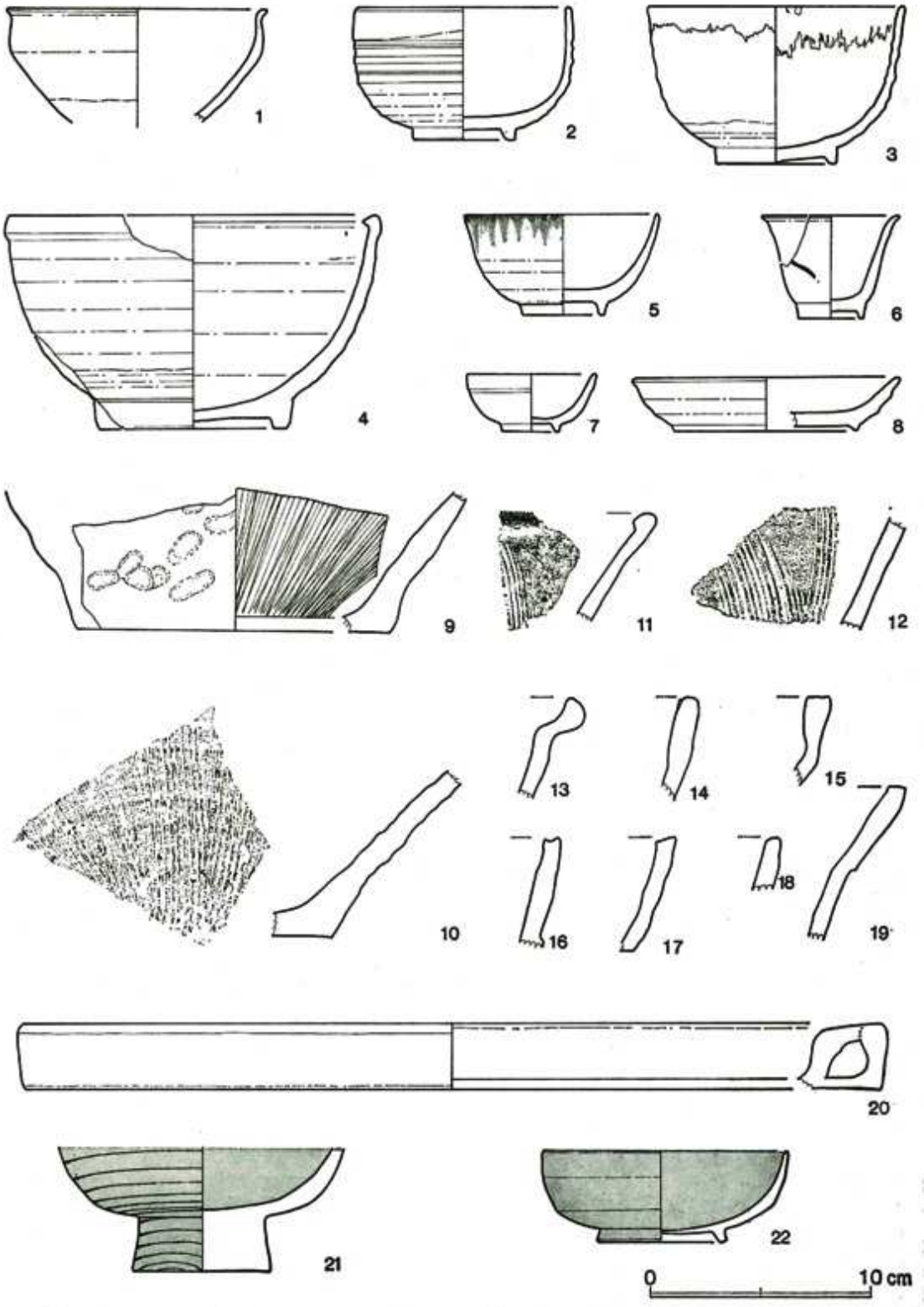
器　種	番号	大きさ(cm)	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
		残口縁≒⅔	丸く鋭い。脚部はやや内湾気味に下がり裾部で急激に外折する	全面に主として横方向のナデ調整が行なわれる。脚部内面も比較的丁寧なナデ調整が施される。	色調：脚部内面を除き赤色塗彩
高　坏	4	底径　9.0 現高　5.6 残底縁≒⅙	脚部は、ほぼ直線的に外方に下がり、裾部でやや外反気味にさらに開く。裾部との境は小さな段をもつ。端部は丸く、極めて厚手の作りである。	坏部外面は、僅かにヘラ削り痕が残り、内面は比較的丁寧なナデ調整。脚部外面、特に裾部には非常に丁寧なヨコナデが施され、また基部付近には柔かい粘土の貼付とともに横方向の指頭痕が認められる。脚部内面は、非常に丁寧なヘラナデ調整。	焼成：普通 胎土：比較的粗 色調：赤褐色
坩	5	口径　10.3 最大径13.0 器高　15.2 残口縁≒¼	口縁部は頸部より直線的に立上り、上半でやや内湾しながら開く。端部は丸い。胴部は、下半部の張った扁平球形を呈し丸底である。	口縁部は、内外面ともヨコナデ胴部外面は風化著しく不詳、底部外面は、ヘラ削りの後丁寧なナデ調整。頸部内面にはヘラナデによる幅1.5cm程の面が残る。胴部及び底部内面はヘラナデ調整。	焼成：普通 胎土：細砂を含む 色調：橙褐色
小形壺	6	口径　12.6 最大径14.1 現高　13.0 残口縁≒⅙	口縁部は外反気味に短かく立上る。端部は丸いが、やや内削ぎ気味。胴部は、薄手の作りでほぼ球状を呈す。	口縁部は、内外面ともヨコナデ胴部外面は縦方向のヘラ削り痕が顕著で、ナデ調整は殆ど認められない。内面は極めめ丁寧なヘラナデ調整が施される。	焼成：良好 胎土：細砂を多量含む 色調：灰褐色
小形壺	7	口径　14.6 器高　11.4 残口縁≒⅔	口縁部は外反しながら立上り、内面に稜をもつ。端部は丸い。胴部は上半で張り、大きく内湾しながらすぼまって底部付近で屈曲する。	口縁部は、内外面とも丁寧なヨコナデ。胴部外面は木口状工具による縦方向の調整の後、横方向の丁寧なヘラミガキが行なわれる。内面は横方向のヘラナデが顕著。	焼成：普通 胎土：密 色調：灰褐色
小形壺	8	口径　15.8 最大径16.0 器高　12.9 残口縁≒⅙	口縁部は稜を持たず、わずかに外反しながら立上る。胴部は口縁から滑らかに続き、内湾しながら平底の底部に至る。	口縁部は、内外面とも比較的丁寧なヨコナデ。胴部外面は縦方向の粗いヘラ削りのみで、ナデ調整は認められない。内面は、極めて丁寧なヘラナデ調整。	焼成：良好 胎土：密 色調：灰褐色
土　玉	9	最大径 1.6 全長　6.8 孔径　0.5	中央部に最大径をもち、両端が緩やかに細くなる。	縦方向に調整。	焼成：不良 胎土：砂粒多 色調：灰褐色
土　玉	10	最大径 1.8 全長　5.9 孔径　0.6	ほぼ筒状を呈し、両端がやや丸味を帯びる。	縦方向の調整。	焼成：不良 胎土：砂粒多 色調：灰褐色



第8図 出 土 遺 物 (3)

器　種	番号	大きさ(cm)	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
土　玉	11	最大径 1.1 全長　3.2 孔径　0.4	ほぼ筒状を呈し、両端がわずかに細くなる。孔は成形時の変形により扁平。	縦方向にナデ調整を施され、表面は平滑。	焼成：普通 胎土：密 色調：黒灰色
土　玉	12	最大径 2.7	言わば雨滴形を呈する。下半部に最大径をもち、上部は絞ったようにすぼまる。	表面は比較的丁寧にナデられている。	焼成：普通 胎土：密 色調：灰褐色
土　玉	13	最大径 2.6 全長　3.0 孔径　0.5	ほぼ球状を呈し、上部が僅かに突出する。孔はやや中心をはずれている。	表面は比較的丁寧にナデられている。	焼成：普通 胎土：密 色調：灰褐色
土　玉	14	最大径 1.9 全長　1.9 孔径　0.3	ほぼ球形を呈する。孔は中心をはずれ、やや扁平である。	表面は丁寧にナデられ、極めて平滑である。	焼成：良好 胎土：緻密 色調：黒灰色

器　種	番号	大きさ(cm)	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
天　目	9図1	口径　12.0	外傾する体部は途中からほぼ直立し、口縁部は短く外反する。	釉は全体に薄く、釉溜りもほとんどみられない。胎土は淡い黄白色で焼成は良好である。	約½残存
椀	2	口径　9.8 器高　6.1 高台径 4.8	ロクロ成形で体部は内湾しながら直立し口縁に至る。体部には沈線状に4本入る	灰釉と鉄釉による掛け分け茶椀である。胎土は淡い黄白色で黒色微細粒が少量混入する。焼成は良好である。	約½残存
椀	3	口径　11.8 器高　7.2 高台径 5.5	大きめの椀である。ロクロによる成形で、口縁部がわずかに外反する。	内外面とも濃い黄褐色釉で口縁部に白色釉が見られる。釉は体下部までである。胎土は灰白色で焼成は良好である。	約½残存
片　口	4	口径　17.0 器高　9.8 高台径 8.6	ロクロによる成形で、口縁部は外側に彎曲し、口縁の内側は鋭い稜をつくる。	体部下半まで白い化粧土を施した後、黄褐色の釉をかける。胎土は淡い黄白色で焼成は良好である。	約½残存
椀	5	口径　8.8 器高　4.6 高台径 3.6	ロクロによる成形で体部は内湾しながら立ち上り外傾ぎみに口縁へ続く。	染付の椀である。口縁部の染付は器を逆さにして施したものと考えられる。胎土は灰白色で焼成は良好である。	約½残存
椀	6	口径　6.4 器高　4.7 高台径 3.0	ロクロによる成形で外傾する体部から口縁部は外反する。	染付の椀である。体部中位に斜めに一本の線が見えるが欠損のため全体は不明である。胎土は暗褐色で焼成は良好である	約½残存
椀	7	口径　6.0 器高　2.6 高台径 2.6	体部は内湾し口縁部外側で段をもつ。	型による成形で白色の胎土に透明釉がかかる。かなり新しい時期のものであろう	約½残存
皿	8	口径　12.4 器高　2.5 高台径 8.4	高台断面はやや三角形状を呈し、体部はやや内湾ぎみに外反する。	志野の皿である。ロクロ成型で3回転で引き上げている。釉はやや灰色ぎみである。胎土は淡黄色で焼成は良好である。	
擂　鉢	9	底径　14.8	平底の底部から体部は外傾し口縁に続く。内面下端は使用によりすりへっている	外面は指頭と考えられる痕跡が残る。櫛目一単位7本である。胎土は石英を含み黒褐色である。焼成は良好である。	約½残存 焼締
擂　鉢	10		体下部破片。体部は直線的に外傾する。平底。	ロクロ成形、鉄釉がかかる。櫛目は一単位8本。胎土は灰色で石英、長石を含む。焼成良。	



第9図 出 土 遺 物 (4)

第10図　煙管実測図

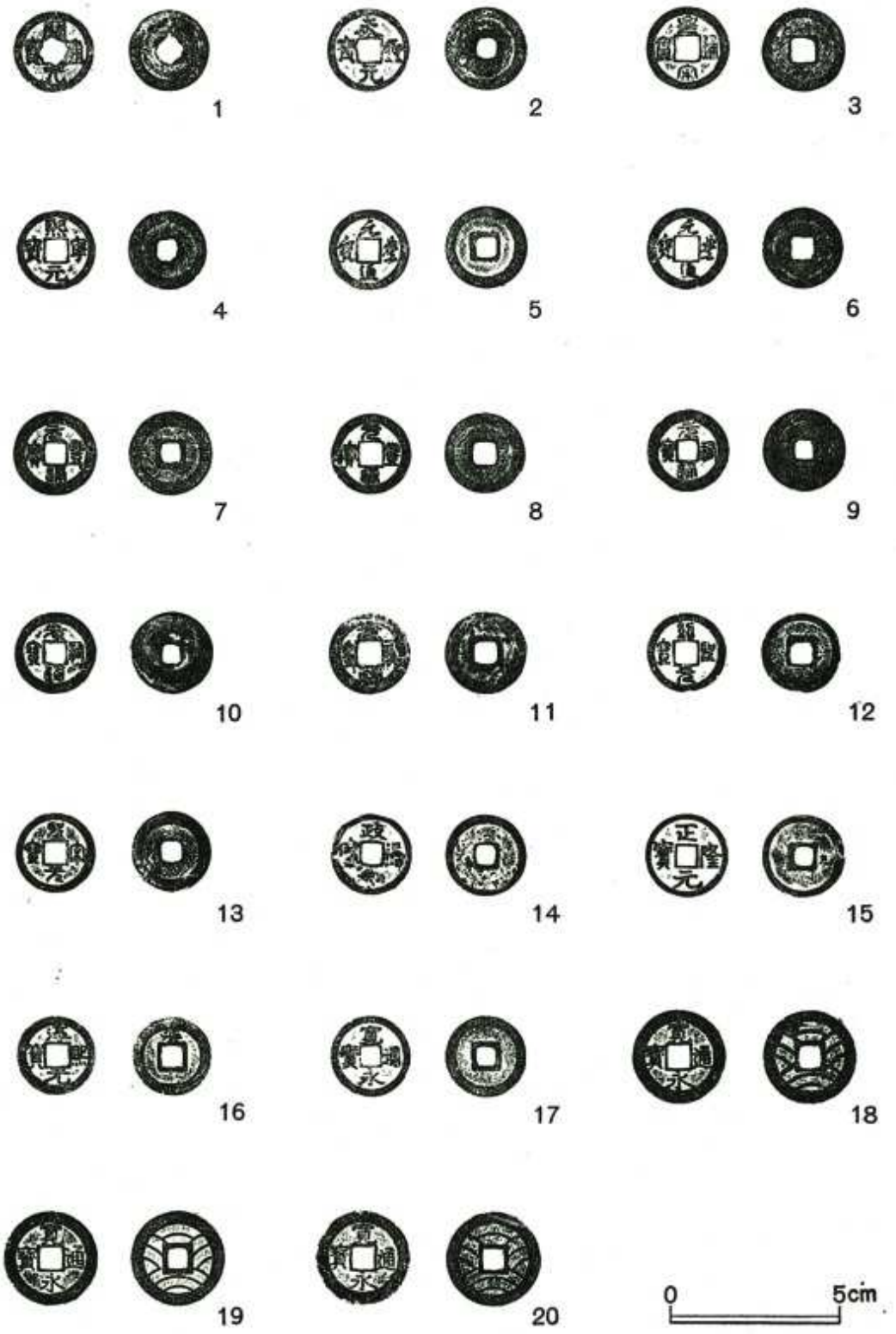
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
擂鉢	11		口縁部破片。外傾する体部から口縁が肥厚し内側に軽い稜をつくる。	ロクロ成形と思われる。黒褐色の鉄釉がかかる。櫛目は一単位7本以上。胎土は白色で黒色粒と赤色微細粒が混入する。焼成は良好。	
擂鉢	12		体部破片。	鉄釉がかかる。櫛目は一単位15本。胎土は淡い黄白色で黒色粒を含む。焼成は良好である。	
擂鉢	13		口縁部破片、外側にはり出して肥厚し内側に段をもつ	ロクロ成形。鉄釉がかかる。胎土は淡い黄白色で黒色粒を含む。焼成は良好である。	
内耳	14〜20		14〜20は内耳土器である。口縁部の形態に若干の差異がある。口は鍋形になると考えられる。尚14、15は内耳部の剝離したものである	14、16〜19は内外面黒色で胎土は灰白色赤色粒、黒色粒を多量に含む。内外面ともナデであるが14は外面下半はケズリである。15、20は内面赤褐色、外面黒色で15は胎土に金雲母、石英を多量に含む。20は赤色粒を含む。	
椀	21	底径　6.2	底部は刳り抜きのない厚い底部で体部は内湾する。	内外面とも黒漆が塗られている。	約½残存
椀	22	口径　12.0 器高　4.2 高台径 5.6	高台はやや外に開く。体部は薄い底部から内湾して立ち上がり外側で稜をつくる	内外面とも黒漆の上に朱漆を重ねて塗っている。	約½残存

その他の遺物

第10図は煙管である。1・2が雁首で3〜5は吸口である。いずれも緑青がでている。1はやや大きめであるが、1・2とも脂返しの湾曲は小さいものである。この他に図示できなかった遺物には砥石が1点、和釘数点、桃、梅、胡桃等の種子、淡水産と思われる貝がある。陶器磁類の出土総数は216点と少いものであるが、陶磁器では、元代のものと思われる青磁の破片が1点でている。また灰釉の香炉、菊皿の破片、三島手の鉢の破片なども出土している。

No.	銭名	銭径	穿径	銭厚	No.	銭名	銭径	穿径	銭厚	No.	銭名	銭径	穿径	銭厚
1	開元通宝	23.0	—	1.1	8	元豊通宝	22.8	6.8	1.2	15	正隆元宝	23.6	5.7	1.5
2	天聖元宝	23.7	6.0	1.2	9	元祐通宝	23.3	5.7	1.2	16	淳熙元宝	22.4	6.3	1.3
3	皇宋通宝	23.6	7.3	1.1	10	元祐通宝	23.2	6.8	1.2	17	寛永通宝	23.2	5.6	1.2
4	熙寧元宝	22.4	6.4	1.2	11	元祐通宝	23.2	6.8	1.3	18	寛永通宝	26.9	6.5	1.2
5	元豊通宝	23.2	6.1	1.2	12	紹聖元宝	22.8	6.1	1.4	19	寛永通宝	27.1	6.1	1.2
6	元豊通宝	23.0	6.8	1.3	13	聖宋元宝	22.8	6.3	1.5	20	寛永通宝	27.0	6.3	1.2
7	元豊通宝	23.9	5.8	1.3	14	政和通宝	22.9	6.0	1.7					

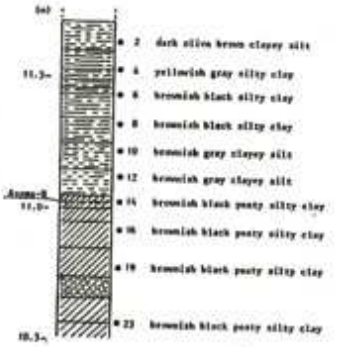
古銭観察表（単位mm）



第11図　古　　銭

V 結 語

太田遺跡は、県道古河加須線の建設に伴なう事前調査として発掘が行なわれたが、その発掘に関しては、(1)後背湿地に属し、冬期でも包含層以下では常に水の滲み出る低湿地における比較的大規模な調査で、県内でも類例の少ない調査であったこと。(2)渡良瀬川低地域では、自然堤防上の「飯積遺跡」を除けば発掘調査例は全くなく、特に後背湿地上の本遺跡のような部分については土層の状況、遺物、遺構の検出状況等について殆ど不案内であったことなど極めて未経験な部分が多く、従って調査方法の面でも台地上の遺跡に準じた方法で行ってきた。しかし、今後はこの様な調査の増加は大いに予想されるところであり、その際、遺跡の立地状況、地理的環境等を事前に考慮し、それらに重点を置いた調査方法を選択してゆくことが必要であろう。本報告がそれらの一助とでもなれば幸いである。



第12図　資料採取地点柱状図

さて、太田遺跡より出土した遺物はおよそ1600点を数えるが、完形若しくは復元可能なものは図示したものが全てで、多くは細かい破片として出土している。また、時期的にも古墳時代のものが多く、特に６Ｃ後半、鬼高Ⅱ式の段階に属するものがほとんどである。従って、これらの主体となる土器についてみるならば、(1)層位的にはほとんどが１～３層より出土している。(2)型式的にはかなり狭い範囲に限定される。(3)ほとんどが細片としての出土で、かなり磨滅しているものもある。(4)出土遺物の分布もⅡ区西半～Ⅲ区東半の範囲で特にⅡ区Ｂ―67グリッド付近やⅢ区９～14列付近など凹地になっていたと思われる部分に密集しているなどの点から、本遺跡の遺物の多くが該地で使用され、廃棄されたものではなく、他地域から河川等によって流されて来たものと推定される。

また、本調査ではⅢ区Ｃ―14グリッドの資料を用いて花粉、珪藻、鉱物の分析を行なってみた※(第５図H-H′・第12図)。その結果、鉱物分析からは№14の試料（５層に相当）付近に浅間Ｂ降下スコリア。軽石層に対比されると思われる一次テフラが存在することが判明した。従って、もしこれが天仁元年（1108年）に比定されるテフラならば、前記の土器は明らかにこれより上位から出土しており、この点からも土器型式と出土層位の年代との矛盾が指摘できよう。

最後に、花粉分析及び珪藻分析の結果について簡単に報告しておく（第12図)。

本遺跡の土層は、№14付近を境として下位が植物片を多く含む泥炭質シルト質粘土（Ⅰ帯）上位がシルトあるいは粘土（Ⅱ帯）よりなる。そしてⅠ帯ではコナラ・アカガシの両亜属が高率に出現し、フサモ・アサザ等の水生植物が目立つ。また珪藻でも好アルカリ性の好止水性種が多産する。従って、本帯からは暖温帯性の気候と、池沼等の富栄養湖的な止水域における堆積環境が推定される。Ⅱ帯はニヨウマツ亜属の高率出現と水田雑草を含む水性植物によって特徴づけられる。また珪藻では好アルカリ性の好流水性種・不定性種が優占する。従って、本帯ではⅠ帯の池沼的環境とは異なり、水田のような、それ程水位がなく流水の影響を受けやすい不安定な堆積環境に変化したと推定される。

※　パリノ・サーヴェイ株式会社　「微化石分析報告書」

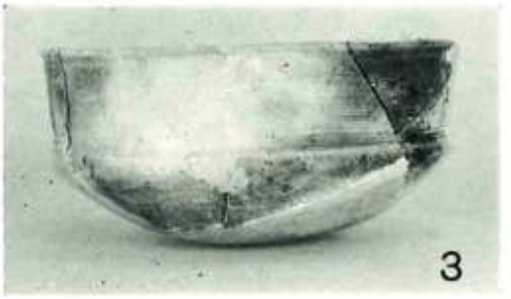
図　　版

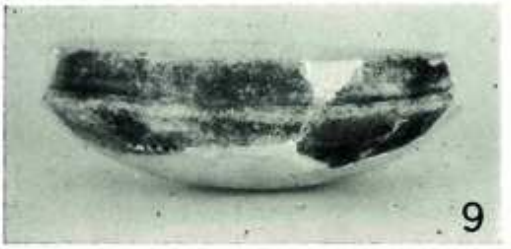
図版1

Ⅱ区全景（東より）

Ⅲ区全景（西より）

図版 2





11

12

13

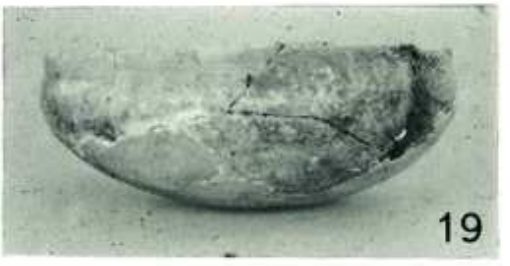
14

15

16

17

18


19

図版 4

1

2

3

4

5

6

7

8

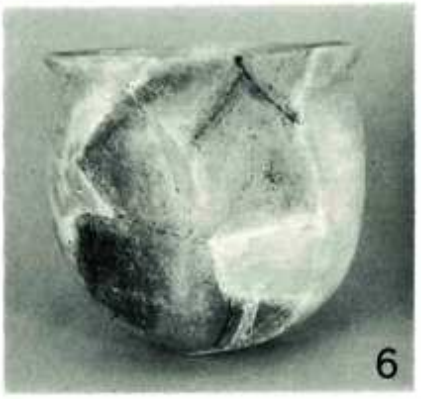
1

2

3

4

5


6

7

8

図版 6

1

2

3

4

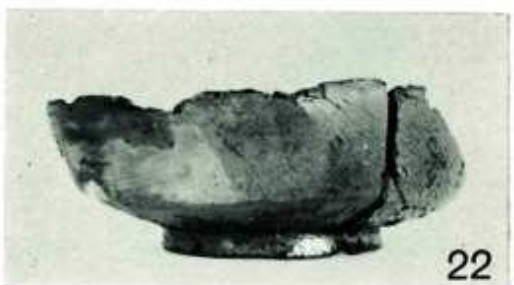
5

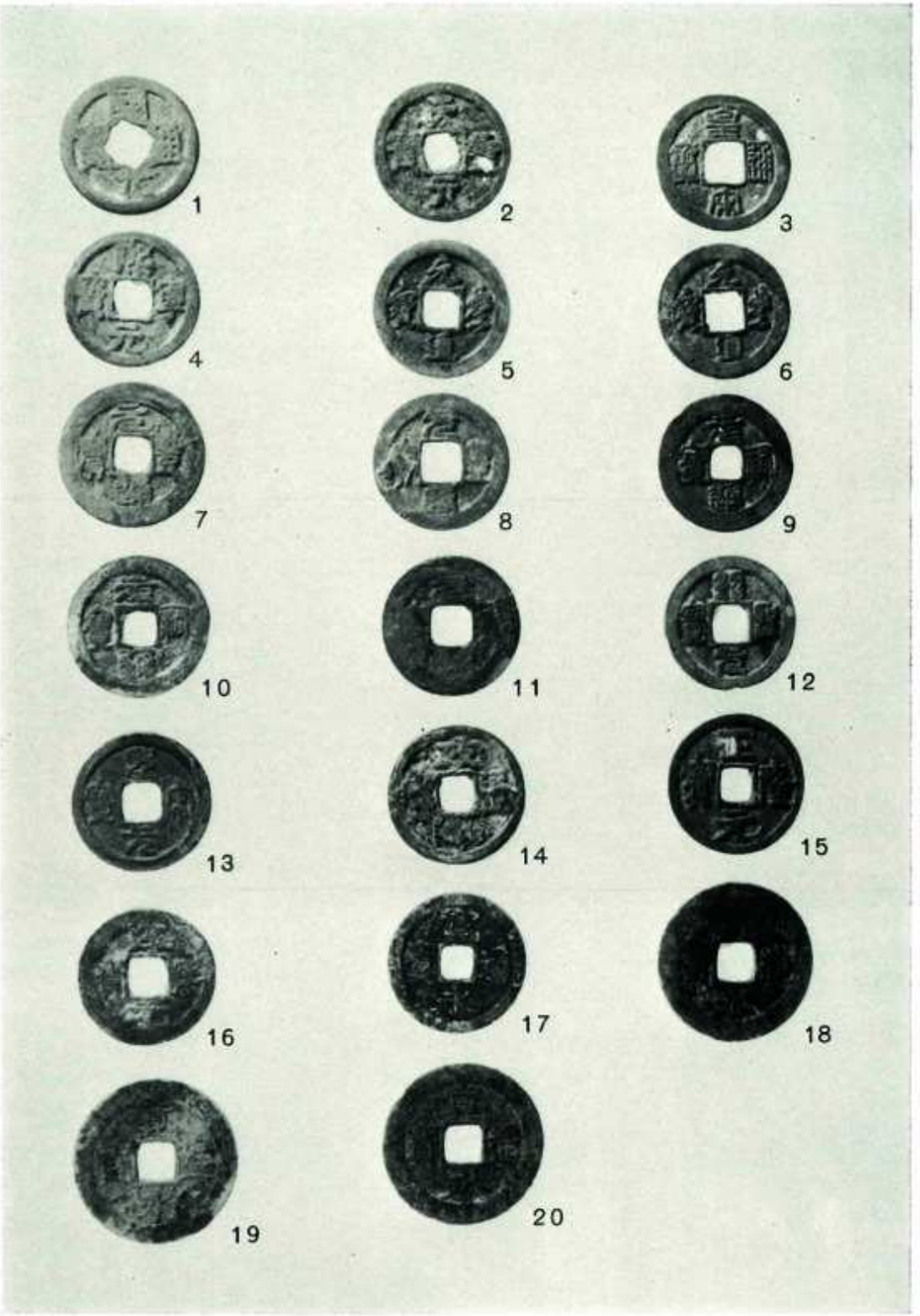
6

7

8

21


22


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第49集

県道古河・加須線関係
埋蔵文化財調査報告書

太　田　遺　跡

昭和60年3月20日　印刷
昭和60年3月31日　発行

発行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒330 大宮市櫛引町2—499
電話（0486）52—2231

印刷　有限会社　山　陽　印　刷